

■抄録

レクチャーシリーズ「ひとはひとと、いかに向き合いうるのか」より

レクチャー 2 「クィア・スタディーズ概論」

講師：菅野優香氏(同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員)

2024 年 1 月 21 日 (日) 京都芸術センター・フリースペース

様々な学問の知見を参照しながら他者理解の問題を考えることを目的とした連続レクチャー「ひとはひとと、いかに向き合いうるのか」。第 2 講目では、視覚文化とクィア理論・批評を専門とする菅野優香氏（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教員）がクィア・スタディーズの基礎について講義を行った。

はじめに菅野氏は自身の研究者としてのスタンスについて「まず作品から入って、そこにクィア理論をどういうふうに接続できるかという形で常に考える」タイプだと説明し、過去 3 年にわたり京都精華大学のプログラムを通じてナオミ・リンコン・ガヤルド氏のアート作品〈ホルムアルデヒド・トリップ〉に向き合ってきた過程を振り返った。菅野氏は 2021 年度に「クィア・オブ・カラー批評—アメリカにおける非白人の知と経験」という題でレクチャーを行い、白人中心のエリート主義的なものと見られがちなクィア理論を多様化させ豊かなものにしてきた、ホセ・エステバン・ムニョス、ロドリック・ファーガソン、ガヤトリ・ゴピナスなどの非白人の理論家たちについて詳しく取り上げている。このレクチャーで強調されたのは、これらの論者たちがセクシュアリティを人種・政治・経済の問題にどう結び付けて分析するかという問題意識を持っていたこと、そしてその際に文化やアートに着目しそこに資本主義や帝国主義への対抗の可能性を見出そうとする傾向があったということだった。さらに 2022 年度のレクチャー「サバイバルの戦略—クィア・オブ・カラーとパフォーマンス」では、ガヤルド氏の作品に現れる様々な思想的・批評

的・理論的モチーフについて、クィア・オブ・カラー批評や様々なクィア理論のコンセプトを駆使しての読み解きが行われた。菅野氏はガヤルド氏がクィア理論に大きな影響を受けていること、その作品世界が非常に重層的であることを指摘し、本レクチャーではクィア・スタディーズの基礎をおさらいしつつ、前年度の話をもさらに深める形でガヤルド氏の作品について考えてみたいと展望を述べた。

クィア・スタディーズにいう「クィア」とは何か。この言葉は元々は「奇妙な、いっふう変わった」という意味の英語の形容詞だが、1910年代ごろには主に男性同性愛者を侮蔑的に指す用語として使われるようになっていた。1980年代に入るとエイズ禍を背景にこの言葉の意味は劇的に変化し、主に非異性愛者が自分を名指す言葉として「クィア」を用いるようになる。つまり、他者表象ではなく自己表象としてのクィアである。菅野氏はクィア・スタディーズやクィア理論などという時はあくまでこの自己表象としてのクィアというものを前提にしていると説明した。クィアという概念はなかなか定義が難しいものの、少なくともこの語に対する二つの共通理解が存在すると菅野氏は語る。一つは、異性愛規範を批判的に再考することを目指している点。もう一つは、男／女や異性愛者／非異性愛者といった二元論な考え方を疑い、既存のアイデンティティやカテゴリーを問い直す視座を持っている点である。こうした特徴を備えたクィアという言葉／概念はアクティビズムの用語として、また研究領域として同時期に立ち上がってきた。アクティビズムの分野では、例えば1990年にエイズアクティビズム組織のACT UPから派生した団体が自らをクィア・ネーションと名乗ったことが一つのメルクマールと言える。他方の研究の領域では、同年にカリフォルニア大学で開催された研究会議でテレサ・デ・ラウレティスがクィア理論を提唱し、セクシュアリティをめぐる議論の深化に先鞭をつけることとなった。

菅野氏はデ・ラウレティスが1991年発表の論文「クィア・セオリー—レズビアン&ゲイセクシュアリティーズ」で語っている内容を次のように整理する。まず、ジェンダーやセクシュアリティをめぐるアイデンティティの区分が非常に細分化されてしまったことへの反省から、それらをもう一度まとめて考えようとするのがクィア理論であるということ。それと同時に、ゲイ&レズビアンと括られがちな両者の間に実はジェンダーによる非対称性があり、差異が潜んでいることを指摘している点。さらに菅野氏は、デ・ラウレティス

が人種や階級といった視座からも互いの差異に目を向け検証すべきだとこの時点ですでに述べていることを指摘した上で、しかし実際にそれが具体的に分析されるにはクィア・オブ・カラー批評の登場を待たなければならなかったとまとめた。

続いて菅野氏は、クィア・スタディーズがセクシュアリティ研究であるかどうかという問いについて、その答えは「イエスでありノーでもある」と述べた。セクシュアリティがジェンダーの下位概念とみなされる風潮がある中で、プライベートなものとしてそれまで表に出ることが少なかったセクシュアリティについて語っていきこうというのがクィア・スタディーズの出発点にはあったと菅野氏は言う。しかし同時に、ジェンダーやセクシュアリティは人の生を構成する多様な要素の一つにしか過ぎない。菅野氏は「一人の人間の中には様々なアイデンティティがあって、時にある要素が前景化されてくるというそういう生を私たちは送っているので、人種とかジェンダー、階級、年齢、健常であるのか障害があるのかといったいろんな要素と絡みながらセクシュアリティを生きているということがあるかなと思います」と語る。クィア・スタディーズもまたこのような問題意識の深まりから、個人のアイデンティティのあり方だけでなく、家や家族・国家への帰属の問題や、ローカル／リージョナル／ナショナル／グローバルな出来事とセクシュアリティの結びつきといったことを次第に射程に含めるようになっていった。その中でクィア・オブ・カラー批評の大きな関心ごととなったのが、資本主義、ネオリベラリズム（新自由主義）、そして植民地主義の問題であったと菅野氏は言う。

こうした問題群はギャルド氏の作品にも反映されている。菅野氏は例として〈ホルムアルデヒド・トリップ〉のビデオゲームを模して構成されたシーンにネオリベラリズムに関連する様々なワードが散りばめられていることを指摘する（例えば作中に出てくる

「accumulation by dispossession（没収による蓄財／略奪による蓄積）」はネオリベラリズム批判の第一人者であるデイヴィッド・ハーヴェイの言葉である）。ネオリベラリズムとは、政治的かつ経済的な自由が人類の富と福利を最も増大化させると主張する思想・理論のことで、具体的には市場や貿易の自由化、規制緩和、公共資源の私有化、福祉事業の削減などといった政策を通して実践される。菅野氏はこのネオリベラリズムは徹底した個人主義、自己責任論、家族の価値の称揚、多様性や流動性の重視といった特徴を持つが、実

はこのような自由や進歩を基調とした考え方はクィアとも親和性が高いと指摘する。例えば性の多様性が重視される風潮や、クィアな個人が「良き消費者」となって自由を謳歌するという考え方も新自由主義的な価値観との相性が良いと言える。一方で、自由や人権、民主主義といった進歩のレトリックには、侵略の口実に使われたり特にイスラム圏の人々を排他的・後進的な他者として描き出す危うさもあると菅野氏は言う。一例として菅野氏が挙げたのが、オランダでの移民申請において、男性同士がキスしている写真や女性の裸の写真を見せて申請者の価値観を審査するということが行われていたケースだ。ここではセクシュアリティが近代性を測るための指標として用いられており、ネオリベラリズムとクィアの親和性の高さが見て取れると菅野氏は解説する。ネオリベラリズムに対しては、クィア理論からも批判が行われている。菅野氏は、脱政治化された LGBT 運動や文化のあり方を「ホモノーマティビティ」という概念を使って批判したりサ・ドゥーガンや、同性婚など法的な権利と承認を要求し社会への包摂を目指す傾向を「クィア・リベラリズム」と呼んで批判したデイヴィッド・エン、ナショナリズムと結びついたアメリカの性的例外主義のあり方を「ホモ・ナショナリズム」と名付けて警鐘を鳴らしたジャスビル・プアーを例に挙げた。

続いて菅野氏は再びガヤルド氏の作品〈ホルムアルデヒド・トリップ〉に立ち戻り、これを時間をめぐる作品として捉えることができると話した。同作では殺害された先住民のアクティビストであるベティ・カーニョの存在を現在に呼び戻そうとする中で「人間と非人間の境界や、生きていることと死んでいること、過去と現在というものの境界をかく乱するような、いったら亡霊的な時間というものが作品化されている」と菅野氏は分析する。そこでは主要な登場主体であるベティ・カーニョ、アショロトル（別称アホロートル。メキシコサンショウウオ）、月の女神コヨルシャウキらはいずれも異なる時間、複数の時間を体現する存在として立ち現れる。菅野氏はここに、クィア理論における時間論との共鳴を見出す。例えば、エリザベス・フリーマンは発展的・直線的な時間のロジックに対抗する快樂のポリティクスとして歴史にアプローチする「エロトヒストリオグラフィー」という概念を提唱し、またホセ・エステバン・ムニョスは「未来性」という概念に現在を支配する暴力的な非対称性に抗する可能性を見出そうとした。さらに菅野氏はキャロリン・リンショーが提唱した「クィア・タッチ」という概念を紹介し、「現在と過去の周

縁化された人々が、情動的にコンタクトを通して時間を崩壊させ、クィアな歴史的接触によって、時間を越えたコミュニティを形成する」可能性を示すこの概念が、ガヤルド氏の作品の中で死者であるベティ・カーニョを呼び戻そうとしている点とも通じていると指摘した。



こうした時間論の議論は、何をもって歴史の証拠とするのか、というクィアの歴史をめぐる問いから生まれてきていると菅野氏は指摘する。クィアのような周縁化された人間は得てしてオフィシャルな歴史の証拠とみなされるものを残さないが、そのような語られなかった、記録されなかった歴史をどのように掘り起こせるのか。菅野氏は一つの方法論として、ガヤルド氏が実践しているように「現在と過去と未来がごちゃごちゃに共存しているような時間の配置」を企図すること、そしてまた「過去・現在・未来という複数の時間がいかにこの現在で共存し得るかということを実験的に考える」ことが考えられると言う。もう一つ菅野氏が挙げるのがスペキュレーション、すなわち「公的な資料や知というものに頼らずに過去を想像し、歴史を書き直していく」方法論である。これはサイエンスフィクションやファンタジーといった手法を通じて実践に移されている。菅野氏は最後に、今後

クィア理論は進歩や発展のロジックに批判的な眼差しを向けながら複数の時間というものを考えていくべきではないかと述べ、アーティストや小説家が実際にそうした実験を行っていることを指摘して講義を締めくくった。



講義の後の山田創平氏とのクロストークでは、山田氏がまずクィアという概念が日本へ入ってきた頃のことや自分自身で少しずつ理解を深めてきた過程を振り返り、クィアとは資本の動きから距離を取りながら中心と周縁の構造を揺らそうとする営みのことなのではないかという自身の理解を語った。これに対して菅野氏は、クィア理論は元々ゲイ・レズビアンスタディーズには不足しているところがあるという問題意識から生まれてきたが、日本には1990年代前半に両者が半ば混然とした形で入ってきたことを指摘した。その上で、クィア理論を特徴づけるものは、かつてバトラーが語ったように自然で、基盤のように見えるものが実は自然でも基盤でもなんでもなく、歴史的・社会的に構築されているのだということを暴こうとする姿勢ではないかと語った。山田氏からのクィアという営みの連続性についての質問に対し、菅野氏は講義で紹介した時間論はクィア理論の一つの潮流に過ぎず、空間論や時間論、エコロジーといった多様な視点からの議論が生まれ続けてい

ることを説明した。最後に山田氏からのネオリベリズムとクィアの関係についての問いに対して、菅野氏はマルクス主義に基づく主流派のネオリベリズム批判にジェンダーやフェミニズムなどの視点が欠けていることを指摘し、今後はクィア理論が問題にしてきた人種やセクシュアリティといった視座をも含めて取り組んでいくことが必要ではないかと締めくくった。

(作成＝吉田守伸、写真＝仲川あい)